

軽種馬生産と女性の役割 ——これまで・今・未来

高村洋子



高村洋子（たかむら ようこ）

1951年北海道日高支庁静内町生まれ。高校卒業後に日高信用金庫勤務。76年に同支庁様似町で軽種馬生産を営む高村伸一氏と結婚。99年に牧場女性の地位向上を目指して日高地方東部の牧場女性による「名牝クラブ」を立ち上げ、2009年には日高全域に拡大した「馬女ネット」で発足から15年まで会長を務める。元北海道地方競馬運営委員会委員。ほかに21年まで様似町議会議員6期、チャイルドラインほっかいどう理事など。高村氏の牧場生産馬には父・秀司さん時代にインターグシケン（菊花賞）、伸一氏名義以降にイブキファイブワン（北九州記念）、インターシュプール（新潟記念）、スターマン（鳴尾記念）、サトノプログレス（ニュージーランド・トロフィー）、ガルボ（函館スプリント・ステークス）、ペイシャエス（ユニコーン・ステークス）など。

軽種馬生産牧場の嫁

軽種馬生産業に携わるようになり50年、後継者の残る魅力ある軽種馬経営を目指し、女性として、母として、経営パートナーとして時に何足ものわらじを履き「誰かの“一歩”のきっかけに」との想いだけで、自分自身のできる範囲から少しずつ取り組んできた活動も、気づけば試みたあれこれが多くなりました。これまでの歩みと、今、そして未来に向けて考えていることを、「Hippophile」をお読みの皆様に知っていただければ幸いです。

1976（昭和51）年、私は北海道日高地方静内町（現・新ひだか町）の生家を出て、同じ日高でもさらに東の様似町で軽種馬生産業を営む牧場の長男、高村伸一と結婚しました。当時は結婚イコール嫁ぐ時代。女が家に入ると書いて嫁。そう呼ばれることに違和感を抱いていても、その思いを言葉にするなど考えられないほど、「嫁入り」が当たり前の価値観として認識されていました。一人の人間として個を尊重されるような時代ではなく、女性は、ただ嫁であり、ただ労働者として、誰よりも早く起きて家事、厩舎の作業を担う、都合の良い小間使いのような存在だった時代。結婚する前までに培った経験、キャリア、両親の教えなどは結婚した途端に不要になった感覚を、今でもくっきりと覚えています。

社会的な立場も役割も無いので、出掛ける用事も無ければ家から離れる時間も無い。仕事、家事を休める

のは風邪を引いて熱がある時だけで、それもせいぜい半日程度。これは私に限ったことではなく、多くの女性（嫁）が当たり前に受け入れ、あるべき「嫁の姿」に自分を近づけようとしていた時代だったように思います。よく働き、健康で、家の為に尽くす良い嫁という世間で、その人の価値が決まっていました。「カラスの鳴かない日があっても、高村の嫁が馬屋にいない日は無いな」と、地域のある名門牧場の長老が言ってくれた言葉に慰められるような気持ちになりながらも、朝から晩まで労働者として働き、父や夫が休む時間も食事の用意、後片付け、言葉通り休む間もなく仕事と家事、育児の繰り返し、毎日毎日続く。自分が苦勞してきた義母も「女は黙って作業だけしていればよい」と、嫁にも同じ苦勞を求めます。そうでもして自分の人生の辻褄を合わせなければ、自分を肯定できなかったのかもしれませんが（写真1）。

唯一家を離れられる機会として「若妻会」という会合がありました。農協婦人部の下部組織で、農家の嫁たちの集まりです。料理講習とか健康相談とか、いわゆる「生活改善」が趣旨ではありますが、何をするにも親部会の「婦人部」への慮りがあります。いきおい、たまの集まりも姑・舅の行動批判と家業の不満だらけの後ろ向きな場となります。皆同じ思いなんだと共感こそすれ、明日に繋がる張り合いは得られず、悶々とした思いが募るばかりでした。エネルギーがあるのに責任ある仕事を任されることなく、勿論、牧場の経営計画や翌年度生産馬の配合計画について相談されるな



写真1. 馬産地の牧場では女性労働が欠かせない（日高地方浦河町の牧場）

どありえない。そもそも女性は農業生産人口にカウントされていない、本当に「何者でも無い」存在だったのです。

これでは母の世代に生きた女性の立場と何も変わらない社会を次世代に引き継ぐことになりはしないか？ このまま馴染んでいくしかないのか？ いや、馴染めない！ と、身も心も疲れ果てていた昭和の最後の頃、気持ちの空虚が不注意を招いたようで、私は重い結果を伴う交通事故を起こしてしまいました。すっかり塞ぎ込んで、馬屋に出て働くことすらできません。私のみならず家中、暗い日々が続きました。そしてあるとき、見かねた家族から「馬に乗ってみたいらどうだ」と勧められたのです。後に知ったことですが、先に記した「カラスの鳴かない日があっても～」と私を褒めてくれた長老はじめ日頃の私の姿を見てくれた方々が案じてくれて、家人にそう声をかけてくれたとのこと。勧められるまま、お隣の浦河町にある JRA 日高育成牧場の協力で様似町が行っていた乗馬教室に通うことにいたしました（写真2）。

時代の変化と女性活躍への道

ところでそのころ、私たちが依ってたつ競馬サークルでは「競走馬の生産過剰」「生産調整が必要」との声がささやかれ始めていました。それぞれの牧場の取り組み如何によって経営存続の可否が問われる時代に突



写真2. JRA の協力を得て行った「馬女ネット」技術研修会（2009 年）

入したのです。とりわけ、北海道の玄関口である新千歳空港から遠く、馬主や調教師にとって不便な日高東部地域にある牧場主たちにとって「馬が売れなくなる」という危機感は深刻でした。生産牧場の経営多角化を迫られるようになったのです。

我が家はたまたま、若駒の育成トレーニング場に隣接していたこと、夫はもちろん馬に乗りますが、私も馬乗りを始めていたこと、なにより経営存続の瀬戸際だったことから、サラブレッドの初期調教を行う育成業も行う

ことで収益を稼いでいく方針を打ち立てました。この業務はやがて、育成用に厩舎一棟を造設し、他の牧場から生産馬を預かってセリ市に向けて初期調教や馴致を行うコンサイナー業への挑戦へと続いていきます。

この新しい方針のもと高村の牧場を再建していこうとしたとき、初めて私も経営参画のスタートラインに立つことができ、経営管理も担うようになっていきました。厩舎作業やデスクワークではありません。私も育成馬に乗りました。「女が馬に乗る？ しかも嫁が！」。それだけで波紋が広がる時代。「だから女はダメだ」と言われたいよう、馬のご機嫌観察に細心の注意を払い、緊張の糸を張り巡らせていました。

それを可能にした土台は、幼少期からの父の教えと母の根性です。

静内町の生家は開拓農家です。父は己に最も厳しい人でしたが家族に対しても同じであり、身体の丈夫でなかった母の努力は並大抵ではありませんでした。ですから私は小学生の時から学校が終わると真っ直ぐ家に帰り、洋服を着替え農作業の手伝いです。友達と遊ぶ時間など皆無でした。ですが父は私を町の珠算学校に通わせてくれました。それも「(学校が休みの)土曜日の午後と日曜日の朝を使って、田舎(町の市街地から離れた農業地帯)の子供達に教えて欲しい！」と直談判したのです。父は数字に強い人でした。それだけに、地域差による教育格差を心配したのでしょう。農繁期を迎えた農家の子供達は学校を休んで作業を手伝い、兄弟や出面さん(その時期だけの作業手伝い)の子供の面倒を見る役割でしたが、私と兄は休まず学校へ行くことができました。大晦日には1年間の家計簿、経営簿の集計があります。ソロバン学校に通う私と兄の出番。二人の合計が一致しないと父のダメ出しで終わりません。父はきっと、農家経営の難しさ、それは頭と身体の使い方に左右されるのだと教えたかったのでしょう。女の子に教育は要らないという時代でした。兄の「ついで」で習わせてもらった珠算でしたが、高村の牧場での経営参画にあたって、これが私の支えになったのです。

奇しくも私は、軽種馬産業の低迷をきっかけとして、女性の身で牧場経営にかかわることができるようになりました。これはチャンスでした。もっと何か女性の力でできることはないか？ これからの時代、牧場の妻たちも馬というものに対する知識と技術を学ばな

ければ経営が成り立っていかないのではないかと。そんな思いで立ち上げたのが「名牝クラブ」です。時は1999(平成11)年、日高東部地区(三石町=現・新ひだか町、浦河町、様似町、えりも町)の牧場の女性が「後ろ姿のかっこいい母さん！」を目指そうという共通のビジョンで集ったのです。活動目標として掲げたのは次の通りです。

- 1: 強い馬づくりと経営安定に必要な技術・知識を修得し、経営のパートナーとして実力アップに努める。
- 2: 女性として、母として、後継者の残る魅力ある軽種馬経営を目指す。
- 3: 未来に向け、牧場女性が活躍できる環境づくりを考える。

活動は北海道庁地域政策部の「イコールパートナー事業」の助成を得て、まずは馬に乗ってみることに、講演会で学習を深めることから始めました(写真3)。苦労はすごくありました。目指したのは親睦ではなく学習団体。ですが、私が高村と結婚してから四半世紀が過ぎてなお「女性が経営に口を挟むことや前に出ることは牧場の衰退につながる」などという感覚が頑強に残っていました。牧場の女性はセリ市さえ行くことがない。セリがあるときはお弁当を作るだけの係です。家から出られないので、離れた種馬所にいる種牡馬というのを見たこともなかった。そういう時代でしたので、有力牧場の年長奥方から「名牝クラブに入るのならお宅の牧場のことはもう面倒をみない」とやんわ



写真3. 「馬女ネット」座学研修会の参加者たち(2014年ごろ)

り圧力を受け、入会できなかった方もいました。進もうとする道は間違っていないと思っても、なかなか成果が見えてこないもどかしさ。しかし一方で、軽種馬産業界の指導的立場にいる男性で、力強く応援してくれる方々もいました。ビッグレッドファームの故岡田繁幸さんもその一人です。どれほど力になってくださったことでしょうか。岡田さんのように支えてくれる方々がいて、私は迷わずに進むことができたのです(写真4)。

こうして私たちが悪戦苦闘していたころ、実は行政側も農業における生産年齢人口の減少に危機感を抱いており、女性の共同参画を推進するべく頭を悩ませていました。「名牝クラブ」の取り組みは、農業関係紙誌のみならず一般報道機関に取り上げられ、やがて活動が評価されて2002年、私は「北海道指導農業士」の称号認定をいただくことになります。

時代は確実に動いていました。2008年、北海道女性農業者ネットワーク「きたひとネット」が発足します。北海道の女性農業者が農業経営者としての自覚を持ち、自信を付けるための研修、意識改革、次世代育成のためのネットワークであり、地域振興と農業施策への提言組織です。私はその設立準備から携わり、初代会長として代表に就き「実らせる」の一念で活動をスタートさせました。代表として私が会員方々へ発信し続けたスローガンは次の通りです。

1：農業女性の意識改革！

2：意思決定、農業政策決定の場に参画。話が来たら

NOと言わない。私で良ければ！と言おう。

3：昨年より一歩踏み出す（1年の振り返りをする）。

4：自主的団体であっても役員に旅費、日当の確保と位置付け（目的達成意識の醸成）。

この活動の成果として、会員の協力を得て、農協役員、農業委員、議会議員などの要職に次々と女性を送り出すことができ、私は10年を一区切りとして次の世代に代表をバトンタッチすることができました。

一方、私の足もとである日高地方東部の「名牝クラブ」の取り組みも、他の地域で同じような考えを持つ方から「日高全域でもやってほしい」という声があがり、2009年に至って日高女性軽種馬ネットワークとして、軽種馬産業への女性参画を目指して新たなスタートをいたしました。名付けて「馬女（まじょ）ネット」です(写真5)。翌年の2010年にはホッカイドウ競馬（北海道営競馬）が日高の門別競馬場開催に集約されるタイミングでした。馬女ネットの活動目標は次の通りです。

1：軽種馬について学び、経営技術向上と我が家の経営改善に繋げる。

2：社会へ発信することにより、日高の軽種馬のイメージアップにつなげ、ホッカイドウ競馬を盛り上げる等の活動を行い、軽種馬産業の振興を図る。

3：女性の役割発揮、地位向上を目指す。経営感覚にあふれ、意欲的な女性農業者の増加・連携を図る。



写真4. ふだんは目にすることがない種牡馬の見学も（2012年）



写真5. 馬産地の子供たちへの「馬女ネット」出前講習会（2012年）

馬女ネット会員は現在約 20 人。馬の身体の仕組み、日々の飼養管理、繁殖牝馬管理、生まれた仔馬にどう関わるか、セリ市場に向けての馴致、作業の安全管理、血統配合といった牧場現場の実務に加え、経理の勉強もします。牧場視察で大手牧場のやり方を吸収し、すると若い方々の意識も高まってさらに高度な勉強も要求されるようになっていきました（写真6）。牧場経営においては男女とも同じ立ち位置にいるべきだ—そういう考え方が「馬女ネット」全体に浸透した手応えを感じ、こちらの会長職も6年務めて後任にバトンを引き継ぐことができました。

地域活性化に向けた新たな取り組み

こうして馬産地における女性の地位向上は着実に前進したのですが、軽種馬生産の世界は社会の景気動向にも左右され浮沈が避けられません。

私が「きたひとネット」や「馬女ネット」の会長職を退いたころ、日高地方では牧場の閉鎖が相次ぐようになっていました。海外から輸入される競走馬の増加に加え、牧場経営者の高齢化が進み、次代を担う後継者の不足に特段の手立てがない状況に陥っていたのです。日高地区で生まれるサラブレッドの数は1990年代前半には年間8,000頭以上でしたが、2015年ごろでは5,000頭台にまで減少しており、それに伴って個々の生産農家の経済状況も深刻化していました。

そんなおり、地域の活性化につながるアイデアとして私が思いついたのが「胎盤」の活用でした。先人達から受け継いできた「日高の軽種馬（今はほぼすべてサラブレッド）産業」というブランドを次の世代につなげるため新しい事業の種をまきたい、日高のサラブレッド産業に新しい風を吹き込みたい、という思いからでした。

いきなり胎盤が出てきて驚かれる方もいらっしゃると思いますが、哺乳類の胎盤＝プラセンタは医薬品や健康食品、美容成分として活用されています。従来、馬の出産に伴う胎盤は汚物として堆肥場に埋められていたのですが、これを活用して新しい貢献ができないかと私は考えました。大切に、丁寧に育てられている日高地方の牧場のサラブレッドの胎盤を使って高品質な原液プラセンタの美容液が作れたら、多くの女性、男性に効果を喜んでいただきながら、日高の軽種馬生産の多面的産業活性化にもつながるのではないかと。

ラブレットはギャンブルのためだけに存在するのではない。サラブレッドの生産現場に彩りが生まれれば、牧場経営に対する若い世代の見方が変わるかもしれない！—と思ったのです。

まずは小規模からということで、自身の牧場で生産した馬の胎盤を使用し美容液の製品化を開始、美容液の名前を『VIVA LADY（ビバ レディ・美馬女）』と名



写真6. 「馬女ネット」10周年を記念してJRAの根本康広調教師と藤田菜七子騎手を招き開催したトークショー（2018年）



写真7. 馬の胎盤を利用した美容液「VIVA LADY」



写真 8. 窓の外に牧場風景が広がるファーム・イン施設「星のイスキア」

づけました（写真7）。サラブレッドの美しさと、馬女ネットを立ち上げたとき時から私のアダ名は「馬女（マジョ）」だったこと、イタリア語で「万歳」を意味する「VIVA」を合わせて命名しました。日高の宝であるサラブレッドを地域振興につなげたいという願いも込めています。クラウドファンディングを活用してPR、現在は美容液に加えて、フェイスマスク、ネックプラスも製造しており、地域のふるさと納税返礼品として選定されています。「馬の顔が見えるプラセンタ」として、明確なトレーサビリティが強みです。

私は約半世紀、馬を育て、馬に乗り、馬に向き合い続けてきました。ある言葉に確たる自信を抱いています。

「馬は人に育てられるが、人こそ馬に育てられている」

この50年で、日本の軽種場生産業を取り巻く環境も、今を生きる女性の意識も、少しずつ、時にはダイナミックに変わってきました。しかし、まだ充分ではありません。まだまだ心の中にこれまでの価値観に囚われている女性がいます。さらにこれからも、女性自身が変わらなければ！ その可能性を信じて、皆の力を巻き込む新しいリーダーシップと異なるチェンジメ

イトに明日からの未来を託したいと私は切望しています。これまでの活動を振り返りながら願うこと—それは、先人たちから受け継いだ日高のシンボルであるサラブレッド産業を守ること、産業がもたらす多面的効果を次の世代に繋いでいくこと、さらには自然と共に暮らすことを尊び地球を大切にすること。私の生き方の根底にあるこだわりは、この想いに尽きるようです。

私は「馬女」です。ですから、これからも人と馬をつなぐ役割を担っていきたいと思っています。馬女としてさらにできることは？ と自問自答を続けていくうちに、自然や生き物に惹かれて訪れた方々をお迎えし語り合える交流の場を設けることに辿り着きました。それが2018年に牧場敷地内に開設した、その名も「星のイスキア」というファーム・イン（写真8）。私ができるおもてなしは満天の星空、静寂、深呼吸で感じる美味しい空気、自分を見つめ直す時間、馬と触れ合い馬と向き合うことで自分と向き合う場所、人と人の絆を確認する所。誰一人も知らない様似町に嫁いでからの失敗談なら数知れずの私ですが、誰もが一人の人間として我を取り戻せる場所であつたらと願って、皆さまをお待ちしています。

最後の純系木曽馬「第三春山号」から みた木曽馬の歴史

大岩友理



大岩友理（おおいわ ゆり）

写真家・ライター。「馬たちに愛を」をテーマに日本各地を訪れ、馬たちとそれを取巻く環境などを撮影取材。長野県木曽町開田高原にて日本在来馬の一種「木曽馬」撮影がライフワーク。公益社団法人日本写真家協会（JPS）正会員。Canon 写真教室 EOS 学園講師。

【HP】 <https://www.yuriooiwa.com>

はじめに

1975（昭和 50）年名古屋大学農学部で学術解剖の後、「骨格標本」と「はく製」となった木曽馬「第三春山号」。現在「骨格標本」は名古屋大学博物館に常設展示され、「はく製」は故郷の開田郷土館に展示されている。当時、既に希少種であった木曽馬が自然死を待たず安楽死を選ばれ、学術解剖されたことは世論の的となった。

「第三春山号」について調べていくと、学術解剖された日の様子は新聞記事や絵物語（写真 1）などには多く描かれているが、その資料は様々な場所に点在し、さらに紛失・破棄されていた。骨格標本となってから約半世紀たった今、当時を知る人々も減り、残された資料も歴史の中に埋没しつつある。貴重な地域文化遺産である木曽馬の歴史資料を風化させないため、改めて木曽馬の歴史とともに「第三春山号」の馬生についてまとめてみたい。

木曽馬の誕生と衰退の歴史

ルーツを蒙古草原馬にもち、朝鮮半島を経て現在の日本在来馬 8 種の一つ「木曽馬」となったといわれて



写真 1. あさじよりこ著『木曽馬物語』表紙
（写真 1～5、10 は木曽馬保存会所蔵）

いる。木曽馬の発祥地は岐阜県の「神坂説」、あるいは採草地が広がっていた木曽八景の一つ「上松の風越山（標高 1699 m）説」とされている。（諸説あり）

主に「農耕・運搬」「堆肥の供給源」に利用され、時代の変遷とともに鎌倉時代以降「兵馬」、江戸時代以降は街道の人・荷を運ぶ「伝馬」として活躍した。また御嶽山麓という土地柄、火山灰土の土地は農作物が限られていたため、「馬産」が貴重な収入源となった。明治維新後、富国強兵を国是とした日本は 15 年戦争に入り、日中戦争のころには農耕馬であった木曽馬も例外でなく「軍馬」として徴収された。その後戦況悪化により、戦場では大型の軍馬が必要とされ、小型の木曽馬は外国産馬との交配による改良を加えられることとなった。1939（昭和 14）年「種馬統制法」発令により「木曽系種雄馬」は淘汰される。純系木曽馬の種雄「宝玉号」廃用によって木曽馬は受難期となり、飼育頭数は次第に減少していった。

戦後の木曽馬保存事業

戦後、小柄で扱いやすい木曽馬は、農耕馬としての需要が見直されるようになった。純系木曽馬の復元のため、昭和 21 年から 3 年間にわたり東京大学の岡部利雄博士らによって木曽馬の学術調査（木曽馬能力検定）が行われた。

また長野県馬匹組合連合会は「木曽馬保存登録事業」を始める。長野県内で本来の木曽馬体型に近似した馬 248 頭を選別測定し「木曽馬登録審査基準※1」を設け、木曽系血液純度が高い木曽馬を本登録馬とした。昭和 21～28 年の調査で登録繁殖牝馬となったのが 49 頭で

※ 1：基準のレベルで予備登録・本登録と分けられた。馬匹組合での木曽馬の登録事業は、昭和 21～28 年で実施された。その後「（社）長野県種馬登録事業会」へ事業移管。

あった。それらは「木曾馬復元の祖」として繁殖に貢献した。木曾馬頭数はその頃、280頭まで回復。日本最後の在来和種として政府より「木曾種」の学術的呼称が与えられ、岡部利雄博士は「日本動物図鑑（北隆館）」へ木曾馬を「原種」と記している。また同時期1949（昭和24）年上野動物園に3頭の木曾馬「きそ号」「おんたけ号」「ひのき号」が寄贈されるなど、木曾馬の認知度は広がっていった。

戦後の純系木曾馬復元の主な課題は「純血牝馬の長期保留とその血液を基準としたかけ戻し配合による復元」と「種馬統制法の影響による種雄不在の解決」にあった。昭和18年「宝玉号」廃用以来、木曾馬の種雄馬不在であったが、木曾畜産販売農業協同組合「原義亮氏」らの尽力で1950（昭和25）年、「武水別神社（長野県千曲市）」にご神馬として奉納され去勢を免れていた「黎明号（後に神明号と改名）」を発見した。払下げを経て新開村の清水実蔵氏所有の純血雌馬「鹿山号」との間に「第三春山号」を誕生させることに成功し、木曾馬保存事業は大きく前進していった。

第三春山号の現役時代の活躍と逸話

1951（昭和26）年4月8日、お釈迦様の誕生日に生まれた「第三春山」号は、生涯700頭もの子孫を残したといわれ、木曾馬の救世主ともいえる貢献馬であった。

【現役時代】

「第三春山号」は新開村の清水実蔵氏が生産した後、昭和28年に農水省種畜検査に合格し「長野県有馬」となった。最初の供用は、奈川村の古畑庄市氏で7年間繁殖と農作業に供用した。その後、木祖村の青木一美氏、笹川栄一氏と供用先を転々としたが、ついには廃用も考えられるようになっていった。

しかし「第三春山号」は当時12歳、健康状態良好であったことから、昭和37年に開田村の坂口末吉氏が飼育することとなる（写真2、3）。4年後、昭和42年に坂口末吉氏が病により逝去すると、「第三春山号」は長野県有種雄馬の任務を終え開田村に無償払下げとなった。払下げ後は、開田村で繁殖供用していた柘植清一氏とともに余生を過ごした。

【第三春山号にまつわる逸話】

坂口末吉氏の孫・純一さんから聞いたお話。

坂口さんのお宅では、「第三春山号」の他、2頭の雌の木曾馬を飼っていた。祖母と母（女性たち）が馬の

世話をし、木曾馬のもっぱらの役割は「馬産」と「畑の堆肥」であった。当時純一さんは高校生で地元をはなれ下宿をしていたが、週末は開田の自宅で「第三春山号」と暮らしていた。祖父の末吉さんが主に「第三春山号」に乗り、種付けに回っていた。また末吉さんがお酒を飲みに行き、酔って帰宅する時でさえ、「第三春山号」の背に揺られて帰ってきたという。木曾馬という馬は「ボンとお尻をたたくと酔っている主人を背にのせて戻り、自宅前で嘶いて主人の帰宅を知らせる」、そういう馬なのだと純一さんは言う。

「第三春山号」の晩年、坂口末吉さんが脳梗塞になり柘植清一さんが飼育者となった頃のお話。柘植さん宅（丸山観音堂の坂の下）への帰り道、坂口末吉さんの宅の前で嘶いてから柘植さんの家へ帰っていったという逸話がある。家族の一員として飼育されていた木曾馬らしい「恩を忘れない行動」からなのだろうか。純一さんの「第三春山号」の印象は、祖母・母ら女性たちが扱える「心優しい馬」だったという。

第三春山号の晩年

【第三春山号 晩年の時代】

日本は高度経済成長期で生産性向上のため機械化が進み、馬の利活用の方は減少していた。木曾馬飼育頭数も1970（昭和45）年頃には90頭。こうした時代背景から昭和40年代、木曾馬は絶滅第2期となっていた。日本人が作った愛着ある木曾馬を失うまいと、開田村長で獣医師の伊藤正起氏を中心に、一握りの愛好家で「木曾馬保存会」が昭和44年結成されたのはこの頃。翌45年、木曾馬保存会は「日本馬事協会長野県支部として加入」「日本中央競馬会（JRA）からの支援」など、様々な取り組みを始め、復元事業に本腰を入れていった。

一方「第三春山号」は昭和48年、純系木曾種雄馬としての多くの子孫を残した功績から日本動物愛護協会より表彰されていたが、体調は悪化の一途であった。昭和49年（第三春山号25歳）には、「骨軟化症」と「黄疸」に加え、老衰から危篤状態にまでなっていた。

【救世主の終着点】

木曾馬保存会では木曾馬絶滅第1期を支え、子孫を繋いだ「第三春山号」の最後をどう迎えるかが問題となっていた。「そのまま自然死を待つ」あるいは「将来の木曾馬保存のため、亡くなった当時の体型を保持し



写真2. 昭和34～37年頃の坂口末吉氏宅前での第三春山号

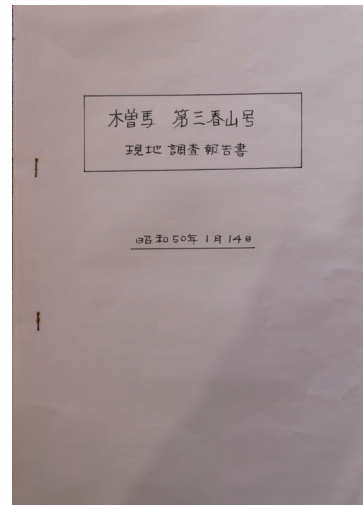


写真4. 第三春山号現地調査報告書の表紙



写真3. 坂口末吉氏厩における第三春山号

た骨格標本とはく製を残すため安楽死させる」。当時の伊藤正起氏（保存会会長）をはじめ、木曾馬血液型研究で古くより交流のあった名古屋大学農学部の富田武博士、木曾馬保存会会員などと協議の結果、「第三春山号」は安楽死を選ぶこととなった。しかし1975年頃の日本では、生きている動物を安楽死させ標本にするという方法が珍しかった。そして、「第三春山号」骨格標本製作資金を募るためにマスコミに公表したことが、逆に社会議論の的となってしまう。記事が掲載された新聞社へは賛否両論、「木曾馬保存会への批判」や「はく製製作に対する資金援助の声」など様々な意見の投稿があった。木曾町役場開田支所や木曾馬保存会には、現在も歴史資料として膨大な新聞記事がスクラップ保

管されている。こうした資料からも「第三春山号」の最期について、当時注目されていたことを知ることができる。

最期の時

【安楽死の選択】

木曾馬保存会に「木曾馬第三春山号 現地調査報告書（昭和50年1月14日付）」（写真4）という書面が保管されている。第三春山号安楽死問題が世間を騒がせることとなり、総理府より「動物の保護及び管理に関する法律」に抵触するのでは、と木曾馬保存会へ調査に入った際のものである。書面内容は「安楽死を選び学術標本にすることについての賛否」について、日本獣医師会獣医・現：（公財）日本動物愛護協会および総理府管理室職員、伊藤正起村長、柘植清一氏（飼育者）の間で話し合いがもたれた記録である。獣医師懇談の中の記述で「春山号が一番幸福な方向を協議すること」とある。1時間30分の間の協議の結果、「第三春山号」は学術解剖の上、標本となることが決定した。「動物愛護に関する問題」について、現：（公財）日本動物愛護協会・増山獣医師の当時のコメントは「天命を全うさせるようにと共に要望したい。然し長く生かすことのみが愛護ではない」としている。「骨軟化症」と「黄疸」も出た高齢馬の現況を調査団が知ったことで、新聞掲載された現：（公財）日本動物愛護協会の第三春山号買取り事案も「外形以上に第三春山号の内面的高齢化が否めず、命の限界がきていること」を悟った上

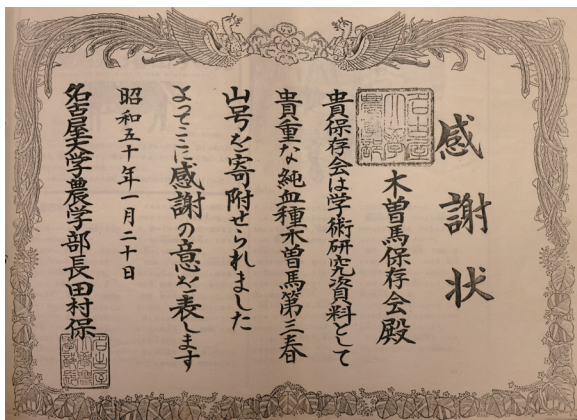


写真 5. 名古屋大学からの感謝状の写し



写真 6. 名古屋大学農学部前における第三春山号。1975.1.17 撮影。
(写真 6～8, 11, 12 は名古屋大学博物館 所蔵)



写真 7. 柘植氏製作の第三春山号草鞋。1975.1.17 撮影

での判断と推察される。

またこの報告書の結びには「木曽馬保存会の嘆願文」が書き添えられていた。それには、木曽馬馬事公苑「木曽馬の里」の構想と資金援助について記されていた。保存会の手元資金が JRA より 80 万、開田村より 20 万と合計 100 万円と記載されており、建設にはほど遠く資金不足であったことがわかる。全国で 40 頭まで減少した木曽馬を馬事公苑「木曽馬の里」に集約し、再起をはかろうと奮闘する保存会の内情をこの嘆願文より知ることができる。

【開田村から名古屋大学農学部までの道のり】

1975 (昭和 50) 年 1 月 14 日、天候は雪。開田村末川公民館に名古屋大学農学部へ出発する「第三春山号」を見送る開田村の人々とマスコミが小さな村へ押しかけた。「第三春山号」は子供たちに胴や首を触ってもらい、最後の飼育者であった柘植清一さんが編んだ滑り止めの「草鞋」を履かせてもらった。そもそも木曽馬は勤が良く主人の指示にしか従わない頑固な気質。この非日常の様子に「第三春山号」は農協が用意したトラックへスムーズには載らなかった。柘植さんの家族なども協力してようやく載せることができた、「木曽馬物語 (あさじよりこ著／自費出版)」に当日の様子が描かれている。

名古屋方面へは現在であれば国道 361 号から向かうが、当時は木曽福島新地藏トンネルが作られていなかったため、トラックは飛騨街道の地藏峠を越えていった。生産者の清水実蔵さんと所有者 (飼育者) の柘植清一さんが地藏峠まで同乗し、付き添った。柘植さんは最期に馬子唄「おくりましょうか おくられましょうか せめて峠の茶屋までも」と唄い、「第三春山号」を涙ながらに見送った。ところが「第三春山号」はその日、名古屋大学農学部へ到着できなかった。大学に詰めかけたマスコミが多く、大学内に入ることができなかった。急遽、愛知郡東郷町にある名古屋大学農学部の農場へ一時避難した。そして数日後の 17 日、あらためて出発。名古屋大学農学部 (名古屋市千種区不老町) に到着した (写真 5, 6, 7, 8)。

【学術解剖 1 月 17 日】

「第三春山号」は名古屋大学農学部にて保田幹男博士が中心となり、学術解剖がされた。当日の様子についてホースメイト VOL.50/2007 年日本馬事協会発刊 同大学富田武博士の寄稿文「木曽馬よ 世界に羽ばたけ」



写真 8. 名古屋大学構内における第三春山号生前最期の姿。
1975.1.17 撮影

の中に「第三春山号は好物のニンジン好きをなだけ与えられ、麻酔薬静脈注射で眠るように昇天した」と記されている。

はく製と骨格標本の完成

【費用捻出】

木曾馬保存会の資金と名古屋大学農学部富田博士の研究費だけでは、「はく製製作」の費用捻出は難しかった。しかし幸運にも「第三春山号」の新聞記事を見た須川常史さん・須川ハクセイアート（滋賀県）がはく製製作を、展示用のショーケースは岐阜県の伊藤重治氏より寄贈されることとなった。

【はく製完成】

1975（昭和50）年4月4日、須川アートによって製作されたはく製は、愛知県名古屋市「東山動植物園」で一般公開されたあと、岐阜市での公開を経て、4月8日「第三春山号」の誕生日に開田村へと戻ってきた。開田村郷土館内に伊藤正起村長、柘植清一氏、富田武博士など「第三春山号」に縁があるものが集まり、序幕式・法要が執り行われたと「序幕法要案内ハガキ（木曾町役場開田支所に所蔵）」（写真9）に記されている。供養式は開田村で戦時中、軍馬として亡くなった木曾馬を弔うために建立された「馬頭観世音菩薩の石碑」

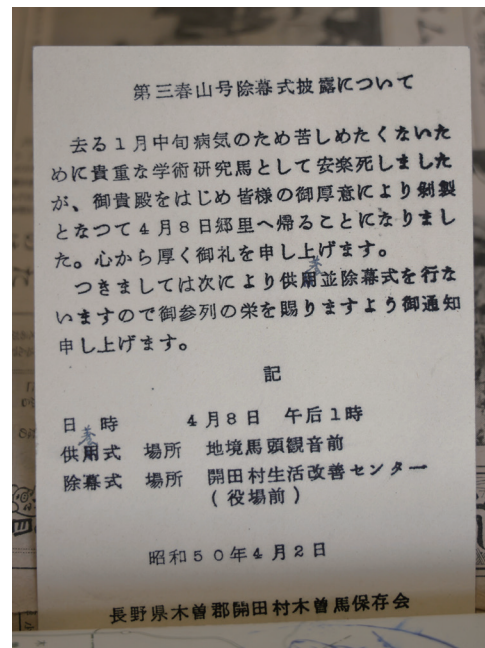


写真 9. 第三春山号剥製完成序幕，法要案内。
木曾町役場開田支所所蔵

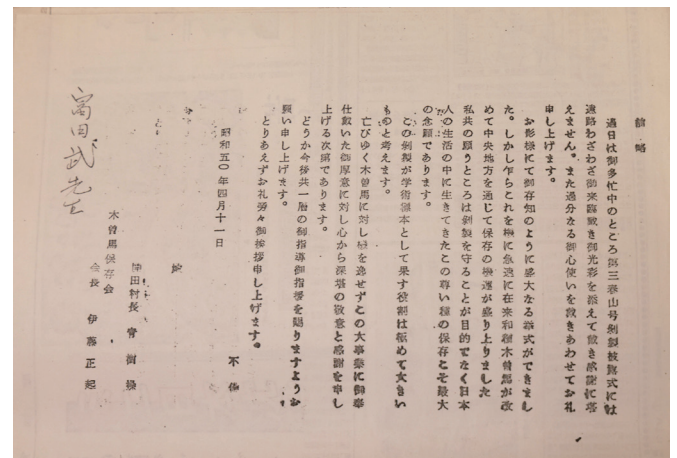


写真 10. はく製序幕式お礼状の写し

前で行われ、続いて木曾町役場開田支所前ではく製の序幕式が行われた。その後の「年忌法要の案内ハガキ」が木曾町役場開田支所に保管されていたことから、しばらく「第三春山号」の法要が行われていたようだ。こうした人間同様の木曾馬への弔いは、木曾の人々が「家族のように木曾馬を飼育していた慣習」と「第三春山号の功績への感謝の証」から執り行われたのだと思われる（写真10）。

【名古屋大学に保管された骨格標本】

常設展示されている「第三春山号」の「骨格標本」について、梅村綾子博士（名古屋大博物館特任助教）は「当骨格標本は全身が見られるように展示しているため、頭蓋骨は通常横顔を見ることになるが、頭蓋骨正面からみるのもおすすめだ」と話してくれた。確かに「第三春山号」の骨格標本は、頭をかしげているように見える。少し愛嬌をもって作っているのか。はたまた別の狙いがあったのか。富田博士ら当時の関係者がすべて故人となった今ではその意図までは知ることができない。

「第三春山号」の解剖を執刀した保田博士は、後に「木曾馬とわたし／朝日新聞（1978.1.6付）」記事で、大型動物、特に「馬」の解剖実習のため木曾馬の入手が時代とともに難しくなっていたと話している。この記事によると、「第三春山号」の学術解剖以前より、名古屋大学農学部では木曾馬を用い解剖実習をしていたようだ。その証拠に当時の「解剖実習ノート」「馬の検査・注射などの証明手帳」など名古屋大学博物館資料が保存されていた。該当馬の購入ができず空のトラックで大学へ帰ったこともあったとも語っている。こうした時代背景から、「第三春山号」の学術解剖、骨格標本製作は未来の木曾馬保存研究への貢献目的でもあったが、大学研究者育成にとっても有難い提供であったに違いない。

第三春山号亡き後の木曾馬保存事業

【第三春山号 最後の子の誕生】

1975（昭和50）年4月8日、はく製となって「第三春山号」が開田村へ帰ってきてから10日余りのちの4月19日、開田村で「安富号（奥田堅三氏所有）」が「第三春山号」の最後の子「春富号」を出産した記録が残されていた。（木曾町役場開田支所所蔵 木曾種雄馬表一覽より）「第三春山号」は開田村へ無償払下げ後も種雄馬として木曾馬保存に貢献していたことを、この記録から知ることができた。

【木曾馬保存の模索】

「第三春山号」亡き後、種雄馬であった子の「蘇山号」が続いて急死。保存会は「蘇山号」の子（第三春山号の孫）で種雄馬「栄昇号」を長野県外から借りうけ木曾馬繁殖を続けた。しかし木曾馬飼育者の高齢化も追い打ちとなり、一時は「最低飼育数30頭」まで減少し

てしまった。飼育頭数回復のため1983（昭和58）年、木曾馬は「長野県天然記念物」の指定をうけた。「文化財保護」を活動目的とし、保存会は「木曾馬保存」の再起をはかることになる。その甲斐あって、1991（平成3）年には124頭まで回復。1995（平成7）年には「木曾町地域文化遺産保護」の一環として悲願の馬事公苑「木曾馬の里乗馬センター」が造成された。「第三春山号」晩年からの課題であった「木曾馬の繁殖と利活用の施設」設立は、その後の木曾馬保存活動への道筋となっていく。

名古屋大学農学部・（故）富田武博士と第三春山号について

【木曾馬との出会い】

開田村と故富田武博士（1932／昭和7年新潟県生まれ。写真11）との関わりは、名古屋大学大学院時代に遡る。当時、富田博士は、開田村へ通い木曾馬の血液型研究をしていた。1961（昭和36）年、論文「馬の血液型とその遺伝」で農学博士号を取得。その後、家禽や在来家畜（牛、鶏など）の研究をする一方で、木曾馬保存にも終生、力を注いだ。また同時に名古屋大学馬術部では、自身も木曾馬を飼育し部活動に関わっていた。



写真11. 名古屋大学馬術部に関わっていた頃の富田武博士。
昭和50年

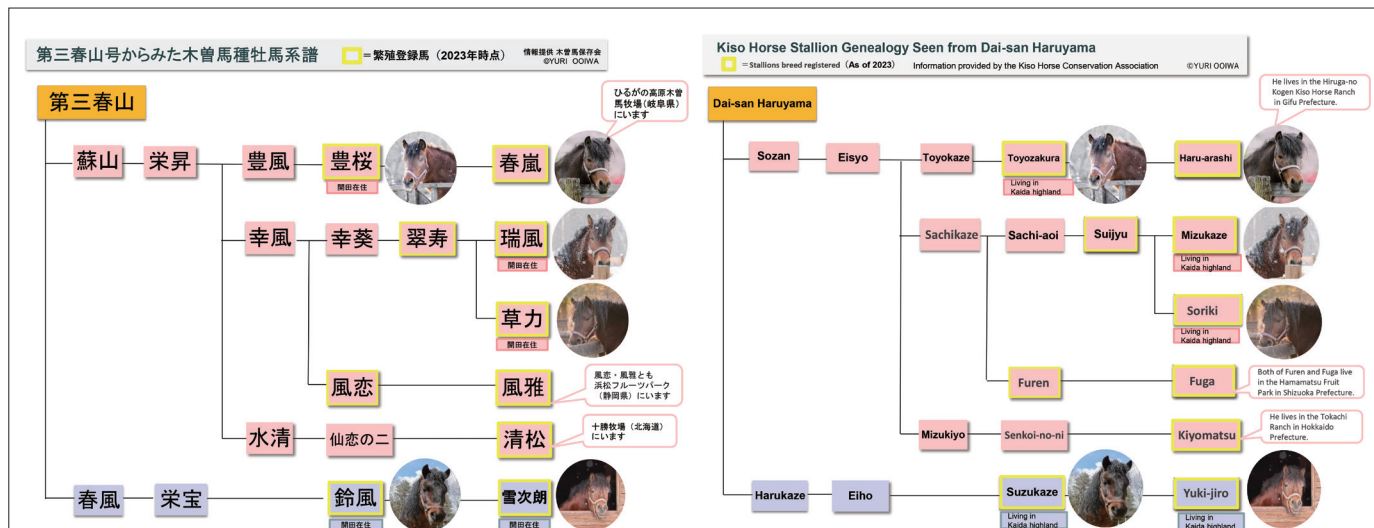


図1. 第三春山号からみた種牡馬系譜。木曾馬保存会監修、筆者作成

【第三春山号との関わり】

富田博士が農学博士となった昭和 36 年ごろ、時代は木曽馬絶滅第 2 期であった。「第三春山号」の子同士
の掛け合わせが増え始め、木曽馬の近親交配が問題に
なっていた時代であった。馬の血液型研究の頃より交
流が深かった伊藤正起氏から「第三春山号の行く末」
と「近親交配を回避し木曽馬を保存する手立て」につ
いて相談されていたことが、木曽町役場開田支所に保
管されていた手紙などからわかった。

【第三春山号亡き後、20年後に木曾馬は復活する宣言】

のちに富田博士は、前出（ホースメイト VOL.50「木曾馬よ世界へ羽ばたけ」）の中で「戻し交配が野菜・園芸の分野では敢行されていること」に触れ、木曾馬に同じく用いることで「純系木曾馬の復元」を提言している。そして結語に、木曾馬の新しい利活用（流鏑馬・老人ホーム慰問など）と増産するため、馬事公苑施設（木曾馬の里）増設のビジョンも記述の中で描き、純系木曾馬の復元事業は「総仕上げ期」に入ってくのだと記している。

【富田博士が考える第三春山号の最期について】

読売新聞朝刊（昭和 50.1.22）コラム欄で「もちろんムダ死ではありません。動物の原種を保存するためには写真や測定値，記憶だけではどうしても足りません。骨格と，それに生きていた当時と寸分違わないはく製がぜひとも必要なのです」と。また「人間のために役立つのが家畜の運命。そりゃ，虐待はしてはいけないが，人間と家畜の基本関係は，どんな場合も崩しては

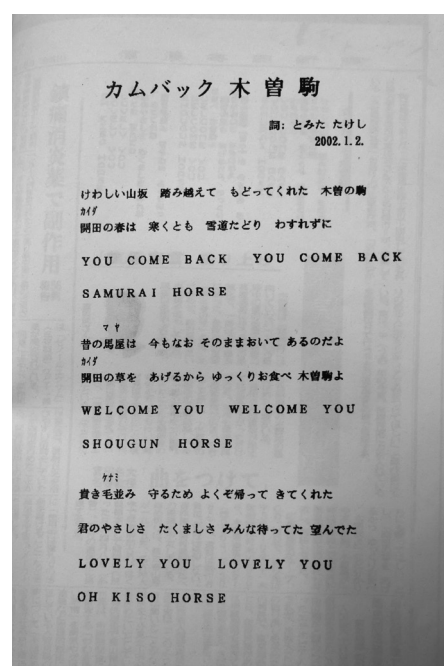


写真 12. カムバック木曾駒歌詞（富田武博士作詞）

いけません。科学者として当然の姿勢ですよ」と述べている。20年後、ダイサンハルヤマは開田に蘇ると予測した。そして富田博士の予測どおり、22年後（1997／平成9年）に生まれた「豊桜号」をはじめ、その後の木曽馬種牡馬たちは、「第三春山号」の純系を受け継ぎ木曽馬保存に貢献している（図1）。

【ユーモアある富田博士の一面】

富田博士は学者としてもさる事ながら、歌好きの一

面が残された資料からわかった。2002（平成14）年1月2日「カムバック木曾駒」という歌の作詞を富田博士が手がけていたのである（写真12）。作曲は信濃毎日新聞紙面で公募され、10作品以上の曲が木曾馬保存会へ寄せられたそうだ。楽曲音源は現在も木曾馬保存会が保管している。こうしたユーモアも研究の新しい発想を生む原動力になっていたのかもしれない。

骨格標本の意味とは～各分野からの考察

富田武博士は、「第三春山号」に関する新聞記事・雑誌などで「骨格標本とはく製」を残すことは木曾馬復活に必要なのだと提言している。学術解剖されてから約半世紀たった今、この2点を残すことは、木曾馬を復元する際にどういった意味があったのだろうか。各分野の専門家に意見をきいた。

【岐阜大学高等研究院 高須正規博士の意見】

「後世の木曾馬復元に必須」の本当の意味は分かりませんが、「基準となる木曾馬の姿」を残すという意味ではないかと思います。これに加えて、私の勝手な想像も記載いたします。はく製となった第三春山を見ると「ああこれが木曾馬の復元の始まりとなる馬なのだ」というような感情が生まれる。その感情の中にあるものが、木曾馬の復元に必須となるものの1つといえるような気がします。

【名古屋大学博物館 梅村綾子博士の意見】

第三春山号の骨格標本およびはく製標本は、純血木曾馬の原型を残す有形資料として貴重であるほか、第三春山号が実在した証拠として、当時の木曾馬と人との協働社会そして人々の思いを後世へ伝え続けるための価値ある資料であると言えます。

【木曾馬保存会事務局、木曾馬の里乗馬センター場長 中川剛氏の意見】

はく製について：数値的データは他の部位を含めて記録として残されていますが、曲線部の膨らみなどは数値だけでは測れない部分であり「後世に見える形で残す」という意味では大変意味のあることなのではないでしょうか。

骨格について：当時は骨格データがそれなりにあり比較可能であったと思います。しかしその後「骨格標本」で残っているものが少ないことから考えると貴重なデータではないでしょうか。また「シンボリックなモノ」という考え方もあると思います。しかし、当時

の時代背景や研究者の言葉としての視点から考えると、後世に「木曾馬の原型そのものとして比較対象を残そうとしたこと」に大きな意味があるのではないかと思います。

【筆者私見】

専門家でない一般人の考えとして、筆者（大岩）私見。各分野の専門家の方の仰るように「シンボリックな存在」という意味が強いのではないかと思います。そして私自身は、骨格標本・はく製は大切な「データの一種」なのではと考えます。骨格標本・はく製として原型を残しておけば、後世の研究で役にたつ日がいつか来るかもしれません。逆に残しておかなければ、記憶や記録そのものすべてが消滅してしまうだけである、と思います。

地域文化遺産として生きる木曾馬

【未来の木曾馬保存のカタチ】

「木曾馬の里乗馬センター」設立後、木曾町と木曾馬保存会は木曾馬を「地域文化遺産」と位置づけている。木曾馬の役割は「農業・運搬」等から時代とともに変化し「乗馬・ホースセラピー・観光資源」での活躍が期待されている。木曾馬頭数は現在約150頭（長野県内外ふくめ）、1年で生まれる仔馬は数頭である。決して多くはない頭数であるが、木曾馬も含め日本在来馬は小柄な体型と従順な気質からホースセラピーへの需要も高まっており、「安定した頭数の確保」は近年の課題といえる。

【新しい試み】

飼育頭数確保に対する最新の研究（凍結受精卵移植研究）が帯広畜産大学で進められている。将来実用化となれば、馬の年1産の壁を越えて複数の代理母馬に受精卵移植が可能となる。しかしそうした研究の一方、馬の増産だけでは木曾馬保存はできないのが現状だ。家畜と一緒に生活することのなくなった現代、「木曾馬飼育者の育成」「飼育費用や施設確保」など課題も多い。

【木曾馬とともに歩むには】

木曾馬保存会を発足させた伊藤正起氏は、著書『木曾馬とともに』の中で“木曾馬の未来”について、馬と接する機会が少ない今日では、馬の飼育は難事業であると言っている。しかしながら、「木曾馬の気質（粗食に耐え強健で先天的に温順な性格）」と「運輸・農耕などで日本文化に貢献してきたこと」などから実用性

を失っただけで木曽馬を絶滅させてはいけないのだと記している。日本人が自分たちの利活用しやすいように作り上げてきた在来馬だからこそ、失ってはいけない馬なのではないかと思う。木曽馬保存の文化的価値を見いだすには、私たち人間が地域文化の中でどのように利活用するかにかかっているのではないだろうか。

おわりに

2024（令和6）年1月17日、「第三春山号」の50回忌を迎えた。木曽馬「第三春山号」がこの世を去り半世紀、当時の関係者はほとんどが故人となり、その馬生をたどるには難しい部分もあった。しかし今回、木曽町役場本庁および開田支所様、木曽馬保存会様、岐阜大学高等研究院・高須正規博士、名古屋大学博物館・梅村綾子博士から貴重な資料開示と取材へのご協力をいただき、また数々の木曽馬に関する文献により寄稿できたことに、心より感謝の辞を申し上げたい。そして偉大な功績を残した木曽馬「第三春山号」に尊敬の念と感謝を捧げたいと思う。

参考文献

岡部利雄, 松本久喜, 三村一. 1953. 日本在来馬に関する研究：特に北海道和種, 木曽馬及び御崎馬について. 文部省科学試験研究報告；第9.

黒田三郎. 1977. 信州木曽馬ものがたり. 信濃路

開田村 編. 1980. 開田村誌（上・下巻）. 村誌編纂委員会

原文子 編著. 2007. 木曽馬のきた道：原義亮の足跡から辿る. 原文子

伊藤正起. 1996. 木曽馬とともに. 開田村・木曽馬保存会.

近藤誠司. 2021. 日本の馬：在来馬の過去・現在・未来. 東京大学出版会.

高須正規. 2016. 生物ならびに文化の多様性を担う木曽馬の保存に関わる人々の様々な視点. 日本福祉大学大学院国際社会開発研究科修士論文.

木曽馬 種の保存に関する総合シンポジウム報告集. 2016. 木曽町・木曽馬保存会

立木冬梢. 1982. わが詩の旅木曽. 風媒社.

NHK 編集センター. 1986. NHK 関東甲信越小さな旅6（味との出会い）. 学陽書房.

丸山彰. 1985. 戦国落穂ひろい：歴史は生きている（長篠戦史資料編；その8）. 鳳来町立長篠城趾史跡保存館.

信濃教育会. 1989. 信濃教育（1237）. 信濃教育会.

信濃毎日新聞社編集局. 1976. よみがえる旅. 信濃毎日新聞社.

河西了吾. 第3春山号安楽死と木曽馬におもう. 獣医畜産新報. 1975.6.15.

木曽馬とわたし（名古屋大学農学部 保田幹男博士 インタビュー記事）. 朝日新聞. 1978.1.16.

人間登場「純血種は20年後に」（名古屋大学農学部 富田武博士 インタビュー記事）. 読売新聞. 1975.1.22.

富田武. 2007. 木曽馬よ 世界に羽ばたけ. ホースメイト VOL.50. 日本馬事協会.

富田武. 1977. 純血木曽馬の復元. 馬銜（はみ）昭和52年春号. 日本中央競馬会.

6日から東山で公開 はく製の第三春山号 岐阜入り. 中日新聞. 1975.4.4.

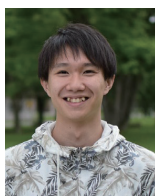
南保泰雄, 坂戸美桜, 羽田真悟, 伊藤忍, 中川剛. 2022. 日本初となる馬受精卵の室温遠隔輸送による木曽馬の誕生. 臨床獣医. 40（13）：46-51.

日本中央競馬会特別振興資金助成事業「受精卵移植による障がい者乗用馬等の生産法確立」. 帯広畜産大学 <http://univ.obihiro.ac.jp>

梅村綾子. 2022. 第29回特別展「岐阜大名古屋大博物館コラボ展」馬コーナー冊子. 東海国立大学機構連携企画 名古屋大学博物館

ウマにおける腸内細菌叢の機能遺伝子解析手法の活用とその可能性

矢野琳太郎



矢野 琳太郎（やの りんたろう）
1996 年大阪府生まれ。2015 年に帯広畜産大学に入学。学部 3 年次から現在に至るまで一貫してウマ消化管内細菌叢に関する研究に取り組んでいる。日本ウマ科学会第 32 回学術集会にて最優秀発表賞を受賞。消化管内微生物の動態を起点としたウマ飼養管理の第一人者になれるよう日々勉強中。趣味は競馬観戦。

プログラム参加のきっかけ

今回 2023 年 7 月より、日本ウマ科学会の国際交流促進事業を活用し、メタゲノム解析技術の習得のため、米国ウィスコンシン大学マディソン校（UW-Madison, 写真 1）の Microbial Sciences Building で研究をされている Garret Suen 教授の研究室に 1 ヶ月間滞在させていただきました。

メタゲノム解析とは、細菌の機能遺伝子をコンピュータ上で解析・推定し、特定の環境中（今回の場合はウマ消化管内）に存在する細菌や細菌叢全体がどのような機能的特徴を有しているかを類推する手法です。従来、ヒトをはじめ様々な動物種の消化管内に共生する細菌の機能解明は、細菌を環境中から分離し、試験管内で培養することで評価されてきました。これ



写真 1. UW-Madison キャンパスの象徴 Bascom Hall

は今現在でも同様ですが、細菌の中には培養することが難しいものも一定数含まれています。このような場合、先述したメタゲノム解析による機能遺伝子の推定結果がデータの考察時に大いに役立ちます。また、細菌を分離培養する際には、標的とする細菌が生育しやすい培地を作成することが大切です。細菌がどのような基質を利用できるかを把握していれば、標的細菌が増えやすい環境を構築することができ、また特定の抗生剤に対して耐性遺伝子を持っていれば、それを培地に混ぜることで他の菌が増えにくい状況を作り出すこともできます。

ウマの消化管内細菌叢に関する研究は、我々ヒトに対して畜産物を提供するウシなどの反芻家畜や、予防医学の観点から研究が盛んに行われてきたヒトやマウスと比較してまだまだ歴史が浅く、細菌の多くは未培養かつ機能未解明であり、その全容は詳細には明らかにされていません。私が所属する研究室では、細菌の 16S rRNA 遺伝子を標的とした細菌叢解析により、ウマ消化管内に共生する細菌を網羅的に解析し、各細菌群の分布割合を明らかにすることで、飼養管理の違いに起因する細菌叢の変化や疾病に関連する細菌群を特定してきました。その一方で、未培養の細菌群が特定の試験区に特徴的なバイオマーカーであった場合、それがどのような機能を持つのかを推察するのは困難を極め、深い考察ができないことも多々あります。したがって、メタゲノム解析を習得することはウマの当該分野のために重要であり、そのノウハウを学ぶために今回のプログラムに応募させていただきました。

UW-Madison について

UW-Madison は、米国の州立大学の中で最もレベルの高い大学の一つと認知されており、米国大学ランキングでも常に上位 50 位にランクインする名門大学で

す。キャンパスはメンドータ湖とメノーナ湖の二つの湖に挟まれており、とても綺麗な景観の中で学問に励むことができます。マディソンは大学の街としても知られ、約27万人の人口の約半数が学生と大学関係者、そしてその家族で占められているそうです。経済学や生物学、コンピューターサイエンスの分野で高い評価を得ており、私が滞在したラボがある Microbial Sciences Building (写真2) は、微生物学博士に卓越した研究研修を提供することを目的に1998年に設立された Microbiology Doctoral Training Program (MDTP) の拠点となっています。MDTPは全米の微生物学大学院プログラムの中で常にトップ3にランクインしており、現在 US News & World Report 誌で微生物学大学院プログラム第1位の評価を得ています。また、細菌やウイルス等の微生物に関する研究者や教育者、医療従事者が所属し、国際的にも認知度の高い Journal of Bacteriology を出版する米国微生物学会 (American Society of Microbiology) およびその前身の会長を務めた UW-Madison の教員は6名おり、ノーベル賞受賞者を複数名輩出するなど、微生物学を研究する世界の重要拠点とされています。

さて、先述したメタゲノム解析は、コンピューターを用いた解析 (バイオインフォマティクス) が基本であり、そこから得られる膨大なメタデータをどのように解釈し、結論付けるかが良質な研究へと昇華させる

上で重要になります。今回私が留学させていただいたラボはこの手法に精通しており、ハイレベルな学術雑誌に毎年のように成果を発表しています。このような環境に身を置き、解析技術を習得しながら研究を展開させていただいたのは大変ありがたく、今後の研究を進めていく上で大きな糧になりました。

UW-Madison での研究

今回の1ヶ月の滞在期間では、2サンプルのデータを用いて解析までの一連のワークフローと、その際に必要なコマンド (コンピューター言語) を学びました (図1)。これまでもバイオインフォマティクスを用いた解析は日常的に行ってきましたが、やはり初めての作業は苦戦を強いられ、ラボの学生にいつも助けてもらいました。彼らも自身の研究活動で忙しいはずですが、“Happy to help” を合言葉にどんな時でも献身的にサポートしてくれたことには感謝してもしきれません。彼らの助言もあり、1ヶ月の間で目的としていた解析データを得ることに成功し、毎週行われるラボミーティングでその成果を発表させていただきました (写真3)。発表後のディスカッションでは、建設的な研究提言をいただくことができました。中には、これまでにウマにとって有害な細菌だと考えられていたものが、見方を変えると有用菌にもなり得るぞ、という斬新なアイデアも飛び出し、大変有意義な時間を過ごすこと



写真2. 今回滞在した Microbial Sciences Building

```
vi-estimate-scg-taxonomy -c contigs-2000.db -p SAMPLE-MERGED/PROFILE.db -C Metabat -o Contigs+profile+collection.txtb@gs-randomaccessmammary:/media/GS_metacollab_1/Collaborators/Rintaro_metagenome$

WARNING
=====
The SCG taxonomy database on your computer has a different version (v95.0) than
the SCG taxonomy information stored in your contigs database (v95). This is notintaro_metagen
a problem and things will most likely continue to work fine, but we wanted to/Rintaro_metagenome$
let you know. You can get rid of this warning by re-running 'anvi-run-scg-
taxonomy' on your database.

Contigs DB .....: contigs-2000.db
Profile DB .....: SAMPLE-MERGED/PROFILE.db
Metagenome mode .....: False

* 11,084 split names associated with 64 bins of in collection 'Metabat' have been
successfully recovered 🍀

Estimated taxonomy for collection "Metabat"
=====
```

	total_scgs	supporting_scgs	taxonomy
METABAT_3	20	20	Bacteria / Firmicutes / Bacilli / Lactobacillales / Streptococcaceae / Streptococcus /
METABAT_26	19	5	Bacteria / Firmicutes / Clostridia / Saccharofermentales / Saccharofermentaceae / Saccharofermentans / Saccharofermentans sp003149065

図1. コンピューターを用いたメタゲノム解析のイメージ



写真3. 毎週月曜日のラボミーティングで発表した時の様子



写真4. メンドータ湖に面したテラスはいつも大盛況

ができました。また、解析を日本でもできるように、帰国後には必要なシステム環境をインストールし、現在は所属研究室でもメタゲノム解析ができるようになりました。今後の研究でも存分に活用していく予定です。また、メタゲノム解析以外にも、Rを用いた効果的なデータの視覚化の方法や、プレゼンテーションの極意、研究を展開していく上での戦略の立て方など、様々なことを学ばせていただき、短い期間ながら実りある滞在となりました。

UW-Madison での生活

大きなイベントが終わった後は、メンドータ湖に面した大学敷地内のテラスで乾杯が待っています（写真4）。ウィスコンシン州に住む人々はビールが大好きだそうです。同州内には200以上ものビール製造会社があるそうです。テラスでは夕方になると各テーブルでパーティーが開かれます。それもあってか、UW-Madisonは米国の“Party Schools”としても常に上位にランクインしています。このオンとオフの切り替えが彼らの強みなかもしれません。ちなみに、帰国前日には送別会を開いていただいたのですが、約9時間にわたる宴会で私はヘトヘトになりましたが、周りの学生はケロッとしており、酒豪の片鱗を垣間見ました。ちなみに、ウィスコンシン州は酪農産業が盛んな地域でもあり、米国内での乳生産量はカリフォルニア州に次いで2番目に多い州です。そのため、飲食店ではお酒のつまみとして様々なチーズを楽しむことができます。私はこの滞在中でチーズカード（チーズをフライにしたもの）



写真5. キャピタルスクエアで行われるファーマーズマーケット

とチーズハンバーガーの虜になりました。

休日は街中を探索するのが日課でした。一番初めに訪れたのは、マディソンのシンボルでもある州議会議事堂です。米国のほとんどの州都には写真のような議事堂が設けられているそうです。また、4月から11月までの毎週土曜日の午前中にはマディソン州議会議事堂の周りに出店が並ぶファーマーズマーケットが開催され、多くの人で賑わいます（写真5）。翌週には滞在先のラボメンバーとメンドータ湖でカヤックを楽しんだ後、ドライブに連れて行ってもらいました。大学の街と言われるだけあって、いたるところに研究棟があり、UW-Madisonの学生を以ってしてもキャンパスと街を区別するのは難しいそうです。



写真6, 7. ウィスコンシン州ミネラル・ポイントで行われたハーネスホースレーシング

ウィスコンシン州の草競馬

現地ではErinさんという方の家に1ヶ月間宿泊していましたが、彼女の知り合いがマディソンから車で約1時間離れた場所に位置するミネラル・ポイントでハーネスホースレーシングを開催しているということで見学させてもらいました（写真6, 7）。公営競馬ではなく、おそらく日本の草競馬のようなものだと思うのですが、トランペットでの国歌演奏など独特の雰囲気がありました。ハーネス競馬を見るのはこれが初めてではなかったのですが、関係者や観客席からの応援への力の入り方に胸が熱くなりました。サラブレッドの競馬やばんえい競馬とはまた違った魅力があるので、機会がある人は是非観戦してみてください。

最後に

今回の滞在では、当初の目的であったメタゲノム解析技術の習得、そして日本国内でもそれが行えるよう

環境を整備できたため、大変有意義な時間を過ごせたと思っています。UW-Madisonの教職員や学生と交流し、彼らと共に研究できたことは私にとって大きな財産です。また、研究に限らず、ソフトボール大会やビデオゲーム大会など、プライベートでも滞在をサポートしてくれたSuen教授の研究室のメンバーには心から感謝しています。帰国した今でも、Zoomなどを用いてオンラインで研究のディスカッションに付き合ってくれるなど、良好な関係を築けているのは彼らの気遣いがあるからこそ。これからもこの縁を大切にしていきたいです。このような素晴らしい経験をさせていただいた日本ウマ科学会の関係者の皆様、そして所属研究室の福間直希助教や指導教員の花田正明教授、西田武弘教授、南保泰雄教授、なにより今回の滞在を受け入れてくださったGarret Suen教授とラボのメンバーに感謝申し上げます。

日本ウマ科学会第 36 回学術集会 臨床委員会企画招待講演について

富岡美千子¹，山谷吉樹²，佐々木直樹³

¹ THicVS (開業)

² 日本大学生物資源科学部獣医学科

³ 山口大学共同獣医学部大動物臨床学研究室



富岡美千子 (とみおか みちこ)

1999 年日本大学生物資源科学部獣医学科卒業。在学中にフロリダ大学にて謝慧勝教授に指導を受ける。2014 年に ChiInstitute が中国で開催したウマの鍼灸プログラムを受講する。獣医科大学にて中小家畜を含む産業動物・ウマの診療に TCMV に基づいた診療を取り入れつつ後進の指導に従事。現在、伴侶馬・競技馬・乗用馬・繁殖馬の診療に従事。

日本ウマ科学会の第 36 回学術集会（国際ファッションセンター KFC Hall & Rooms, 2023 年 11 月 27-28 日）は、コロナ禍あけの現地開催となり、多くの参加者（300 名超）に会場いただきました。これまで日本ウマ科学会「臨床委員会」は、馬臨床において国際的に著明な専門家を招聘して、招待講演、症例検討会、講習会、ラボなどを開催してきました。

2023 年はアメリカ Chi University（氣大学）教授の Xie 博士を招待いたしましたので、その概要についてご紹介させていただきます。

招聘講師紹介

Xie 博士は Chi University の教授であり、フロリダ大学名誉教授です（写真 1）。博士は 1983 年以来、鍼治療や中（漢方）薬を含む伝統中獣医学（TCVM）を教え、実践し、研究してきました。1999 年に米国初の獣医科



写真 1. 海外招聘講師の Huisheng Xie 教授（アメリカ Chi 大学）

大学における鍼治療診療科を設立し、2003 年に鍼灸インターンシップ・プログラムを開始しました。また博士は、米国伝統中獣医学雑誌の創始者、米国伝統中獣医学協会の理事、世界伝統中獣医学協会の副会長でもあります。

博士は、1983 年に中国の西南大学で獣医学学士号を取得、1988 年に中国農業大学で獣医鍼灸の修士号を取得、1999 年にフロリダ大学にて博士号を取得しました。1998 年、博士はフロリダ州レディックに中国鍼灸、中薬、薬膳療法、推拿を獣医師に養成するための Chi Institute（現 Chi University）を設立しました。博士は、コーネル大学、カリフォルニア大学デービス校、コロラド州立大学、中国農業大学（北京・中国）、ソウル国立大学など、20 カ国以上 100 以上の大学および獣医団体——ソウル大学（韓国）、日本大学（日本）、マードック大学（オーストラリア）、プレトリア大学（南アフリカ）、パドバ大学（イタリア）、サンマルコス国立市長大学（ペルー）、米国馬医協会（AAEP）、米国獣医師会（AVMA）、世界小動物獣医師会（WSAVA）、西部獣医師会議（WVC）、北米獣医師会議（NAVC/VMX）など——から獣医鍼灸に関する講義に招待されています。中国における博士の学術的業績には、農業省、国家科学技術委員会、中国農業大学、米国ホリスティック獣医師協会からの功績賞が含まれます。

Xie 博士は 30 冊を超える書籍と 100 を超える査読付き論文の著者でもあります。「Xie's Veterinary Herbology」, 「Xie's Veterinary Acupuncture」, 「Traditional Chinese Veterinary Medicine – Fundamental Principles」などの教科書は、アフリカ、アジア、オーストラリア、ヨーロッパ、南米、カナダ、米国での TCMV トレーニング プロ

グラムに使用され、博士は世界 80 カ国およそ 10,000 人の TCVM を実践する獣医師を輩出してきました。

臨床委員会招待講演

招待講演では Xie 博士に「馬臨床における科学的証拠に基づいた鍼治療」について講演していただきました(写真 2)。博士が初めて米国の土を踏んだのは 1992 年でした。当時、博士が訪問した伝統中医学校では、驚くことに「五行論」と「八綱弁証」のどちらかを主体とする二つの学派に分かれて教育が行われていました。この二つの理論は単に伝統中医学の異なる側面であり、五行論と八綱弁証は切っても切れない関係にあります。どちらも伝統中医学の基本であり、これまでの中国での経験を踏まえて、これら二つの理論を合わせて総合的な伝統中獣医学 (TCVM) 教育プログラムを組み立てるにはどうすれば良いのかと考えていました。

その後、1994 年に家族とともにフロリダに移住し、地元の獣医師と友達になり、その中には動物を対象とした鍼治療や伝統中医学の訓練を受けた人もいました。彼らは伝統中医学の理論的な教育を受けておりましたが、それを動物へ応用して実際に鍼治療をすることはなく、また動物に鍼を刺すことはおろか、ほとんど鍼に触れたこともない状況でした。博士は、これらの優秀な獣医師たちが、彼らが熱心に学んできた技術について自信を持って実践できないことに心を痛め、米国における TCVM 教育プログラムについて改めて疑問を抱きつつ、数年が過ぎました。



写真 2. 招待講演の様子

Xie 博士は 1997 年にかけて米国だけでなく、アイルランド、カナダ、日本などから招待され、TCVM について講演する機会に恵まれました。その中で、博士は西洋医学にとってはまだ新しい、古くから伝わる中国の獣医療についてもっと知りたいと熱望している多くの獣医師たちが存在することを知り、TCVM 教育プログラム構築への使命感に駆られる様々な刺激を受けました。例えばケンタッキー州での鍼治療セミナーの後、ある馬の開業獣医師が博士に近づいてきて、「Xie さん、あなたの 1 時間のプレゼンテーションを聞いて、20 年間の疑問が消えました」と多大なる礼を受けました。さらにカナダ人の獣医師は、博士はもっと教える時間を用意すべきだったと嘆いていました。また Xie 博士を招待した現地大学の教授から、「貴方はこの複雑な古い理論を本当に理解しやすく説明してくれました」と、賛辞を受けました。これらの心強い言葉は、最終的に博士自身を動かし、1998 年に Chi Institute を創立する大きな契機となりました。Chi University の創立により正しい理論の下で TCVM 教育プログラムが行われるようになり、Chi University は今や TCVM の教育や実務訓練を望む何千人もの獣医師にとって真の聖地となっています。

本講演では、鍼治療の手順、白鍼 (DN) テクニック、電気鍼治療 (EA)、水鍼治療 (AA)、馬の跛行診断穴、一般的な疼痛管理のための鍼治療とそのメカニズム、電気鍼鎮痛、各症状の治療のための鍼治療 (背部痛、蹄葉炎と舟状骨疾患、頸椎の硬さ、生殖障害と乳腺炎、ストレス反応、緊急蘇生、代謝能力、喉頭片麻痺、幹細胞) の紹介がありました (図 1、表 1)。

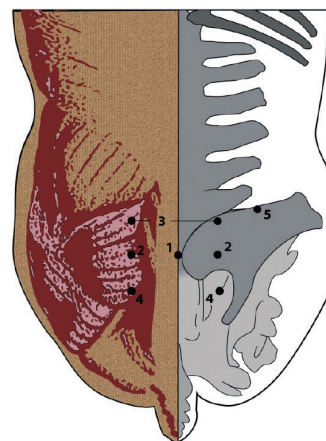


図 1. 馬の不妊症に一般的に使用される経穴
1=Bai-hui, 2=Shen-shu, 3=Shen-peng, 4=Shen-jiao, 5=Yan-chi

表 1. 馬によく使われる古典的な経穴

経穴	解剖的位置	適応
Bai-hui	腰仙骨部の背側正中線上 腰部の痛み	後肢の痛みまたは衰弱, 全体的な鎮静, 陽の欠乏, 不妊症
Shen-shu	Bai-hui の外側 2 寸	腰痛, 不妊症, 一般的な痛みの管理, 後肢の筋力低下
Shen-peng	Shen-shu より頭 2 寸	Shen-shu 同様
Shen-jiao	Shen-shu より尾 2 寸	Shen-shu 同様
Yan-chi	腰角先端と Sheng-peng の中間	雄・雌の不妊症, 運動能力の低下, 後肢の痛み/関節炎

寸は経穴の測定単位。最初の尾椎の長さは 1 寸に相当する。最後肋骨の幅は 1 寸に等しい

鍼刺激, 特に電気鍼は, 5-HT や β -エンドルフィンなどの内因性オピオイドなどの神経伝達物質を放出することが報告されており, これらは鍼が痛みを軽減する主な経路であると考えられます。上記の臨床試験の強度はさまざまですが, 鍼治療は馬の腰痛, 四肢の痛み, 頸椎の硬直, 喉頭片麻痺, 不妊症に対する実行可能な統合治療法であることが示されています。触診における経穴の感度は, 馬の従来の診断と併せて跛行の評価に役立つ可能性があります。馬の臨床において鍼の適用を推進するには, 今後, より綿密に設計された研究が必要とされています。

企業展示

今年度は, 国際ファッションセンター (KFC Hall & Rooms) においてダイヤモンド・スポンサーの EBM トレーディングジャパン株式会社を含む国内 23 社の協賛による企業展示が行われました (写真 3)。また, 会期中 2 回のランチョンセミナーでは, 各社数分程度の協賛企業紹介において各種製品の紹介をしていただきました。企業展示会場では, スタンプラリーを企画させていただき, 企業ブース 16 ゾーンでのサインを集めると, 豪華賞品の当たる抽選会を開催いたしました。また, 今年度は絵画展示コーナーに彩鮮やかな絵画に加え写真も展示され, 日本ウマ科学会会員の作品を見られるようになりました。企業展示コーナーでは入れたてのコーヒーに加え, 午後からはワインも楽しめるようになっています。



写真 3. 企業展示会場

協賛いただきました企業関係者に衷心より感謝申し上げます。来年度も国際ファッションセンター (KFC Hall & Rooms) で企業展示スペースをゆったりと確保できる予定です。会員の皆さまへのサービス提供を充実させて参ります。

結語

2024 年の臨床委員会では, 整形外科を専門とする講師を招聘して, 招待講演, 症例検討会, 実習等を予定しております。会員の皆様のご参加をお待ち申し上げます。

絵画と写真展を企画して

倉田タカユキ



倉田タカユキ（くらた たかゆき）

早稲田大学文学部卒。在学中に馬術部に所属し主将歴任。現在、早稲田大学馬術授業の講師を担当、早実のコーチも歴任し、馬術を教えながら、画家として活動している。ルサロン、ベルギーオランダ国際美術展、コルシカ美術賞展、パリ国際美術展などに推薦出品するなど、国内外の数多くの美術展に出展。2016年～2023年サロンドートンヌ展に連続出品。日仏現代美術世界展にてサロンドートンヌ賞受賞。個展の開催は25回を数える。

日本美術倶楽部 <https://www.nihonbijutsu-club.com/uma/>

日本ウマ科学会評議員、こよなく馬を愛する画家による『伯楽会』事務局

2023年11月27日（月）・28日（火）、両国の国際ファッションセンターで開催された日本ウマ科学会第36回学術集会の会場にて、絵画と写真の展示会を開催いたしました。例年『伯楽会』を主体に、絵画に限り展示会をしておりましたが、今年は写真と絵画を併せて展示するという新しい試みにいたしました。

《伯楽会の歴史》

「こよなく馬を愛するプロ画家の展覧会を作ろう」これは馬術家であり彫刻家の西村修一さんと早慶戦の馬術大会で出会った日に、私に語られた西村さんの言葉です。日本には多くの美術団体があるが、馬というテーマに限定した展示会は開催されていない。君も馬をテーマに画家として活動しているなら、一緒に仲間を募り、会を発足させようではないか。1週間後、8人のメンバーが集まり、新橋のレストラン新橋亭にて発足式が行われました。会の名前は『伯楽会』と決まりました。ご存じのように、伯楽とは古来馬の調教に優れ、馬を見る目のある人、という意味です。日ごろから馬にたずさわるなど、馬をよく知る人が創作した馬の芸術作品の展示会をしたいという願いが込められています。第1回の伯楽会は、馬事公苑内のアートギャラリーにて5月のホースショーにあわせて開催されました。5,000人以上の人が来場し、盛況の内に終わりました。その後、日本橋三越の乗馬サロン『ピアッフェ』での展示や三越本館7階の特別室、東京競馬場の貴賓室など、場所を変えながら開催し、馬の絵画作品を展示してきました。

今回は、伯楽会のメンバー3人に加え、新たに2人のアーティストを迎えての展示会となりました。1人は主に遠野の馬の写真を撮られており、JRA馬事文化賞を受賞されている写真家の高草操さん。実は伯楽会の発足時、西村さんの構想は、絵画部門、彫刻部門、写真部門に分けて、大きな展示会を開催したいというものでした。今回初めて写真部門を加えての展示となりました。もう1人は、斉藤いつみさん。ご自身やご家族も乗馬に親しんでおられる日本画家です。

出品作家の経歴と作品を誌面にて紹介します。

日本ウマ科学会での絵画写真展にご興味のある方は下記アドレスにメールをいただければと思います。

伯楽会事務局（日本ウマ科学会評議員）倉田タカユキ
kurata-tam@nifty.com

《会場風景》



【出品作家の紹介】

絵画部門

倉田 タカユキ (くらた たかゆき)

1962 年横浜生まれ。私立栄光学園，早稲田大学文学部卒。在学中馬術主将を歴任。

永瀬義郎の館，東京版画研究所にて版画を学び，のちに油彩画を発表する。

国内外の数多くの美術展に出展し，馬の絵を中心に個展を毎年行う。また大学の馬術授業を担当し，馬を教えながら馬の絵を描き続けている。

上野の森絵画大賞展 1 次賞候補，ルサロン入選，コルシカ美術賞展など国際絵画展に多数推薦出品

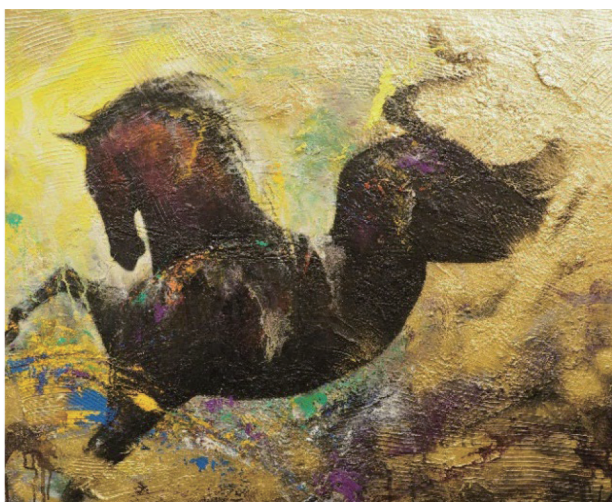
サロンドートンヌ展 2016 年～2023 年連続入選

2019 年日仏現代美術世界展（新国立美術館）にてサロンドートンヌ賞受賞

2023 年 JRA 馬アート展招待出品 個展 25 回

元太陽美術協会会員 現在日本国際美術家協会会員 日本ウマ科学会評議員 伯楽会事務局 早稲田大学馬術講師 早実馬術部コーチ

馬に乗る立場から馬の絵を制作し，絵画を通じて馬事文化振興に貢献したいと考えている。



未来への飛翔 F20 油彩

躍動する馬の姿態を眺めていると，明日に生きる勇気をもらえます。コロナのあいだ自宅での待機期間に制作した作品です。



死にゆく馬 F10 油彩

30 歳を超えた馬。老衰により食べることもできなくなり，やせ衰えていきました。大往生でした。長く馬に接していると馬の死にも多く出会います。命尽きる瞬間まで，馬とともにいることの大切さを痛感します。生命の輝きが消えても永遠に馬との思い出は心に残ります。

水沢 潔 (みずさわ きよし)

1951 年長野県生まれ。銀座サエグサ画廊、京都競馬場エキシビジョンホール、銀座タカゲン画廊、JRA プラザエクウス渋谷、JRA プラザエクウス梅田、新宿アートコレクション・コムニカ、船橋市ギャラリーイグレック、生田緑地ギャラリー等で個展。日本橋三越ピアッフェにて馬の絵展。

2005 年 NHK テレビ『いっと 6 けん』で制作実演と作品紹介

JRA 馬の絵展優駿賞受賞、グループ展多数、JRA 4 点買い上げ、2023 年 JRA 馬アート展 招待出品

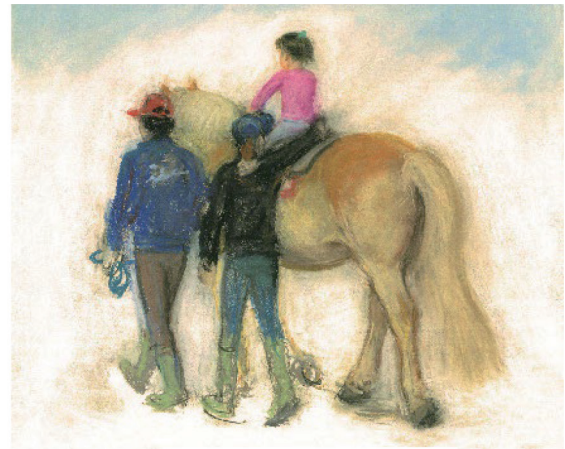
《取材旅行》 1973 年ヨーロッパ中近東東南アジア 6 か月 1977 年ヨーロッパ中東中近東 9 か月

1986 年中国 3 か月

子供の頃から絵を描くのが好きでしたが、夢中になって描ける対象が見つかりませんでした。18 歳の頃馬事公苑で馬と出会い、ようやく本気になって描くことのできる対象に出会うことができました。動き、走り回る美しい馬を描く！ これは面白い！ 子供の頃から山菜採りや小魚獲りが好きでしたが（たぶん原始的な本能）、同様に絵で馬を捕まえる。動物の絵は写真を見て描くのが一般的ですが、それとは全く異なった描き方、馬を見て、その場で描くという方法です。描きたい馬の姿は、斜め後方から見た爆発的なパワーを秘めた美しい後肢。放牧直後の跳ね回る姿。仔馬の動き・しぐさのすべて。馬同士がじゃれ合う姿。上手い人が乗った時の人馬一体となった美しい姿。野原で草を食む姿。



競技会の日・馬事公苑にて



やわらかな光の中で



ハートのお手入れ



洗い場のセフィロス号

奈良 綾乃 (なら あやの)

1975 年鎌倉生まれ

講談社フェーマススクールズ受講後、美術家・川端洗耳氏に師事

2000 年競馬雑誌・優駿「ダッフィーのイラスト塾」にて月間大賞受賞

ヤマハリゾートつまごい「つまごい乗馬倶楽部」のための小冊子制作

プラザエクウス渋谷のショーケース展示等に参加 銀座・池袋等でグループ展参加

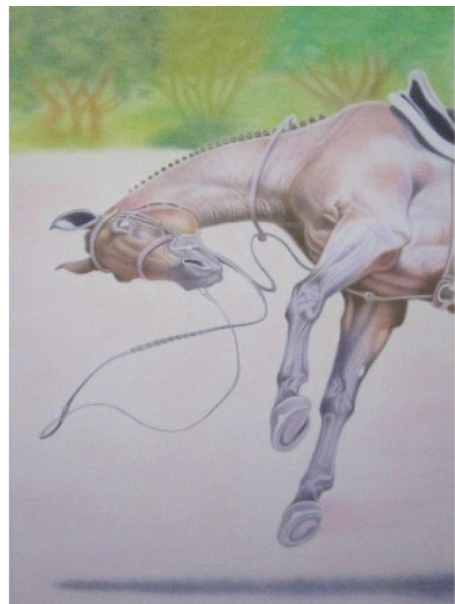
伯楽会会員

馬という生き物を心に描く時、私の頭にはいつも同時に、「聖フランシスコの平和の祈り」の文章が浮かびます。《主よ、私をあなたの平和の道具とさせてください。》で始まるこの祈祷文は、今この時代に、とりわけ馬という存在の尊さ、重要性を考えさせられる内容のように思えてなりません。

かつては戦争の道具としても使われた過去もありますが、彼らは多くの国や地域で古くから愛を、許しを、一致を、真実を、信頼を、そして光と喜びを与えてきた存在です。勿論優れた文化や芸術も。「黒馬物語」の中で母馬ダッチェスは、どんな時も人間を信じて最善を尽くすよう我が子に教えます。そして今こそ私たちは、ブラック・ビューティに学ぶべきなのではないでしょうか。馬という存在には宗教や国家、政治の壁を跳び越えて群れをつくり、駆けまわる力があると信じています。そして、人と人を繋ぐ力も…。馬というかけがえのない人類の友の力を借りて、表現の可能性を追い求め、これからも自分に伝えられること、できることに最善を尽くしていきたいと思います。



鬣に風



Leaping

斉藤 いつみ (さいとう いつみ)

日本画家。東京都立工芸高等学校デザイン科卒業

ギャラリーや百貨店美術画廊，JRA 東京競馬場で個展・グループ展を重ねる。

メディア掲載；スポーツニッポン，茨城新聞，競馬ブック，馬を巡る旅（小檜山悟著），月刊誌馬ライフ，鈴木玲子の世界は競馬でまわってる（ラジオ NIKKEI）



いくつもの朝を越えて

早朝の光をまとって運動する人馬の姿を描きました。
躍動する馬体の瞬間的な美しさと、
たゆまず修練を積み重ねた結果の人馬一体の美しさを込めました。
この調教助手さんの騎乗姿勢は大変美しく、美浦に伺うたびに眺めて
しまいます。



大喝采

94年ダービーでの4角の攻防を描きました。
ナリタブライアンが強さが注目されがちなレースですが、
それぞれの戦法で戦いに行く人馬たちの駆け引きが魅力的な
レースだと思っています。
多くの人馬が夢を諦めずに瞳を燃やしている様子を描きたく、
この構図になりました。

写真部門

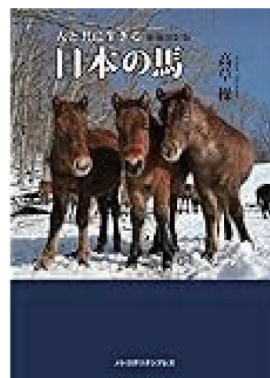
高草 操（たかくさ みさお）

東京都渋谷区生まれ。青山学院大学文学部史学科卒，日本写真芸術専門学校専科修了，写真家秋山亮二氏に師事。「日本の馬」をテーマに日本在来馬や古来の馬産地・岩手県遠野の撮影を続け，個展開催や多数の雑誌に写真や記事を寄稿している。また遠野産馬専門の情報誌「遠野馬通信」の責任編集・発行を手掛ける。第1回遠野市馬事文化賞，2020年度JRA賞馬事文化賞受賞。

<著書>

『遠野馬物語』（里文出版）

『人と共に生きる 日本の馬』（里文出版／メトロポリタンプレス）



<馬への思い>

馬の撮影をするようになったのは，1頭の小柄な黒鹿毛のサラブレッドがきっかけだった。もともと写真を撮るのは好きだったが，そのサラブレッドのご縁で日高の馬産地を訪れ，馬を撮影する楽しさを味わった。競走馬だけでなく日本の在来馬や乗用馬の産地を訪れるうちに，馬が各地の風土の中で育てられることを知った。競馬場や馬術競技会など馬を撮影する機会はいろいろあるけれども，馬が生まれ育った土地へ足を運び，彼らを育んだ風土を肌で感じながら馬たちを撮影することが，私のライフワークだと思っている。



木曽馬・川岸の放牧



北海道和種馬・森の番人

臨床委員会 DVD 販売のお知らせ

日本ウマ科学会臨床委員会では、過去に開催された臨床委員会主催の招待講演ならびに実習のDVDを販売しています。

<お申し込み方法>

以下の申込用紙をご利用いただくか、メールで事務局までお申し込みください。

<価格および代金のお支払い方法>

価格は1セット **3,000 円**です。

お申し込み後、折り返し合計代金をご連絡いたしますので、ご確認の上、下記口座まで代金をお振込みください。納金確認後、宅配便にてお送りいたします。なお、お手数ですが送料は受取人様払いでお願いいたします。

郵便振替口座 記号番号：00130-3-539393

または

ゆうちょ銀行（9900）〇一九（ゼロイチキュウ）店 当座預金口座 539393

口座名：日本ウマ科学会（ニホンウマカカ^クカイ）

----- キリトリセン -----

申込用紙

ご希望のDVDと枚数	(1) 2009 年（第 22 回学術集会）	Dr. Brooks	眼科	() セット
	(2) 2010 年（第 23 回学術集会）	Dr. Richardson	整形外科	() セット
	(3) 2011 年（第 24 回学術集会）	Dr. LeBlanc	繁殖	() セット
	(4) 2012 年（第 25 回学術集会）	Dr. Dyson	跛行診断	() セット
	(5) 2013 年（第 26 回学術集会）	Dr. White	急性腹症	() セット
	(6) 2014 年（第 27 回学術集会）	Dr. Scott	装蹄	() セット
	(7) 2015 年	Dr. Mama & Steffey	麻酔	() セット
	(8) 2016 年（第 29 回学術集会）	Dr. Ducharme	呼吸器	() セット
	(9) 2017 年（第 30 回学術集会）	Dr. Hyde	歯科	() セット
お名前				
ご送付先住所				
ご所属				
電話番号				
メールアドレス				

連絡先：日本ウマ科学会事務局

FAX：0285-44-5676

e-mail：e-office@equinst.go.jp

住所：〒329-0412 栃木県下野市柴 1400-4 JRA 競走馬総合研究所

協賛団体名

団 体 名	〒	住 所
日本中央競馬会	105-0003	東京都港区西新橋 1-1-1
地方競馬全国協会	106-8639	東京都港区六本木 1 丁目 9 番 10 号 アークヒルズ仙石山森タワー

賛助会員名簿

(五十音順)

会 員 名	〒	住 所
(株)アイベック	170-0002	東京都豊島区巣鴨 1-24-12 アーバンポイント巣鴨 4F
公益財団法人 軽種馬育成調教センター	057-0171	北海道浦河郡浦河町西舎 528
公益財団法人 競走馬理化学研究所	320-0851	栃木県宇都宮市鶴田町 1731-2
JRA システムサービス(株)	135-0034	東京都江東区永代 1-14-5 永代ダイヤビル 7F
JRA ファシリティーズ(株)	104-0032	東京都中央区八丁堀 3-19-9 ジオ八丁堀
公益財団法人 ジャパン・スタッド ブック・インターナショナル	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 6F
公益財団法人 全国競馬・畜産振興会	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 3F
公益社団法人 全国乗馬倶楽部振興協会	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 5F
ゾエティス・ジャパン(株)	151-0053	東京都渋谷区代々木 3-22-7 新宿文化クイントビル 14 階
中央競馬馬主相互会	105-0004	東京都港区新橋 4-7-26 東洋海事ビル 3F
物産アニマルヘルス株式会社	541-0053	大阪府大阪市中央区本町二丁目 5-7 メットライフ本町スクエア 10F
一般社団法人 日本競走馬協会	106-0041	東京都港区麻布台 2-2-1 麻布台ビル
公益社団法人 日本軽種馬協会	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 3F
一般財団法人 日本生物科学研究所	198-0024	東京都青梅市新町 9-2221-1
公益社団法人 日本装削蹄協会	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 7F
一般財団法人 日本中央競馬会弘済会	105-0003	東京都港区西新橋 1-1-1
公益社団法人 日本馬事協会	104-0033	東京都中央区新川 2-6-16 馬事畜産会館 7F
公益社団法人 日本馬術連盟	104-0033	東京都中央区新川 2-6-16 馬事畜産会館 6F
一般財団法人 馬事畜産会館	104-0033	東京都中央区新川 2-6-16
文永堂出版(株)	113-0033	東京都文京区本郷 2-27-18

編集後記

最近、料理教室にかよっています。生徒はみな高齢男性。自分で料理をすることもあります。きちんと習ったことはありません。人から何かを習うことは中々気持ちのいいものです。また生徒同士のコミュニケーションも楽しく、こうした交流が気持ちを豊かにしてくれます。料理はバランスではないかと思えてきました。今日は家で先日習得した料理を披露する予定です。

【馬事往来】は軽種馬生産農家の経営パートナー高村洋子さんに、50年にわたる自身の生産農家としての歩みと社会的活動についてご寄稿いただきました。積極性と建設的な意欲が農家の女性の地位向上に役立っていることがわかります。

【馬事往来】の2編目は大岩友理さんから、木曽馬の保存と700頭もの産駒を残した第三春山号の一生の記録を、資料とともに投稿いただきました。取材を重ねて、散逸をまぬがれない資料とともにおまとめいただいた、貴重な記録といえるでしょう。

【海外渡航成果報告】には矢野琳太郎さんから、米国ウィスコンシン大学におけるメタゲノム解析技術の習得について報告を受けました。メタゲノム解析はウマの腸内の細菌叢の研究では有力な技術で、今後の応用が期待されます。

【学術集会】として昨年の第36回学術集会の記事2編を掲載しました。

1編は臨床委員会が企画した馬臨床における鍼治療に関する講演会の記事です。Xie 博士による鍼治療の科学的解説は大変興味深いものでした。

もう1編は学術集会会場で開催された絵画と写真展の再録です。今年も展示会が予定されています。会場も広がるので是非足をお運びください。

(編集委員長 楠瀬 良)

入会申し込み方法

下記宛にお申し込み下さい。年会費は5,000円(国内)です。

日本ウマ科学会事務局

〒329-0412 栃木県下野市柴 1400-4

JRA 競走馬総合研究所内

電話 0285-39-7398 FAX 0285-44-5676

E-mail : e-office@equinst.go.jp

Hippophile, No. 97, 2024

2024年6月発行

<https://jses.jp>

編集委員長：楠瀬 良

発行者：青木 修

〒329-0412 栃木県下野市柴 1400-4

JRA 競走馬総合研究所内

電話 0285-39-7398 FAX 0285-44-5676

郵便振替口座番号 00130-3-539393

または

ゆうちょ銀行(9900) 〇一九(ゼロイチキョウ) 店

当座預金口座 539393

口座名：日本ウマ科学会(ニホンウマカガクカイ)

印刷者：株式会社 アイベック

〒170-0002 豊島区巣鴨 1-24-12

電話 03-5978-4067